
若日島

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若日島

【Nコード】

N2349Q

【作者名】

Tomionno

【あらすじ】

カイが家に帰ってみると、父さんの置手紙があった。

「海、^{カイ}ゴメン。父さんは若日島に行くてくる」

必死の思いで若日島にたどり着いたカイを待っていたものとは！？
高橋留美子が描くようなショート・ショートを意識して書いてみた
掌編小説です。

わかひじま
若日島

2011・01・05 (Wed) 9:30 AM ? 1

1:30 AM

小野富大

帰ってきたら、父さんがいなかった。どこにも。

「父さん？」と呼ぶ声が、古い家屋にさびしく響く。

玄関から入ってすぐの部屋のテーブルの上に、一枚の紙が置いてあった。漆黒の木目に対して、白い小さな紙は痛いほど目立った。

紙に丁寧な細い文字で筆書きされていたのは、たったの二文。

「海、^{カイ}ゴメン。父さんは若日島に行ってくる」

一瞬、現実から切り離されたような気持ちになる。頭がくらくとし、耳が周りの音を聞かなくなる。立っているのやっただ。

とりあえず走り出した。フェリーがある港のほうへ。そして、鼓動も一拍遅れて走り出す。不安さが体を毒していく。頭の中で父さんの姿が駆け巡っていく。縁起でもない。

若日島は自殺の名所なのだ。

父さんの様子がおかしくなったのは、二日前のことだった。

もともとおとなしいひとで、特に際立った様子を表すことでさえ稀だったが、二日前からは明らかに違った。少し遊んで遅くなり、父さんを起こさないように合鍵を使って家に入ってくると、あの毎日十時に寝て五時には起きている判を押したような生活を送っている父さんが、午前零時、まだ起きていた。居間で電気もつけずに机に向かつてなにやら難しい顔をして、ブツブツ言っていた。テーブルの父さんの目に前のおいてあるのは、どうやら預金通帳のようだ。カイが帰ってきたことには気づいてない。

すると、父さんの呟きがハッキリと聞こえてきた。

「ダメだ……考えれば考えるほど……」

何のことだ？ とカイが思っているのと、また父さんは呟いた。

「もう……いいかげん無理なんだよ……」

カイはなんだか怖くなつて、気づかれないように二階に上がつて布団に入った。

次の日、学校で友達に、父さんの奇妙な様子について話してみた。「やっぱり、預金通帳を見てたつてことはお金の問題とか？」と、ムックが言った。

「うーん、もつと何か違うことのような……」と、ミナは返した。

ムックとミナ。「ムック」は赤井幸男で、「ミナ」は淵田美奈。二人とも小さいころからなんとなく一緒にいる、一番大事にしている友達だ。漁師の息子で、ガサツで、ぶっきらぼうなムックと、美人で、おせっかいで、怒ればムック以上に男勝りなミナ、そして最後に物静かなカイだが、不思議と三人でとても仲良くやっていける。別にカイが他の二人の分静かにしているというわけではない。特に話すことがないときは話さないだけなのだ。

本土とは違い、ここらへんの学校は生徒数も数多いわけではないので、幼馴染とは自然と仲良くなるというものだ。他に付き合う相手がほとんどいないのだから。

「そういえば、確か昨日、うちの近くでカイの父さん、見たぞ」と、ムックが思い出したように言った。

ムックの家の近くといえば、港だ。港というよりは、船着場つて言ったほうがおあつたえの小さなものだが。ムックの親が営む魚屋は、船着場から入る商店街の端っこにあるから、港に出入りしている船や人が何気なく見える。

「どこに行つてたのかしら」

「さあ……あの時間帯じゃあ、大したフェリーも出てないしな。あの『若日島』つてところぐらいだ。絶景は絶景だが、毎年自殺者があつたを絶たないつていう近くの島。それに、別にフェリーに乗ろう

「としてるようには見えなかったしな。誰かを待つてるようだったぜ」
「誰かを港で待つて、そしてその日に預金通帳を見て落ち込む……
何か関係あってもよさそうね」

「借金の取立て屋だったりしてな。カイ、お前んちつて借金抱えてたりすんのか？」と、ムックが訊いた。

カイは首を横に振った。父さんは慎ましく生活してるけど、何も金がないからそういう生活をしているわけじゃない。むしろ金は十分にあるハズだ。母さんが病気で死んでしまっってから十五年、酒もタバコも何もなしに、寂しさを紛らわすためにがむしゃらに働いて仕事に打ち込んできたような人だから。本業の作家という仕事にも、カイの学校のPTAにも、そしてその他の地域の行事にも。機会があれば一生懸命打ち込む人なのだ。地元の商店街や学校にも大いに寄付してきたような人だ。

「となると……なんだろうな。コレとか？」と、ムックは小指を突き出した。

カイは激しく首を横に振った。恋人や愛人もあり得ない。母さんと結婚するときだって相当ウブで、つき合うようにさせるのに一苦労したのだと、親戚が集まるたびに両家の家族から聞かされてきた。そんな器用な人でもないように思えた。

「まあ、なんにしろ、心配だよなあ」と、ムック。

「そうよね。カイ、せっかくあんなに素敵なお父さんがいるんだから大事にしなさいよね」ミナは言った。

素敵？　と思ったが、ミナからすればそうなのかもしれない。ミナの父さんは借金とまだ赤ん坊だったミナをミナの母親に背負わせて女作って消えたというトンデモ親父なのだから。ミナのお母さんはおかげで子育てをしながらも小学校の教師という仕事を休まずに続けてこなければならなかった。今日も下町のほうの小学校で一生懸命働いているのだらう。

「明日は父の日なんだから、ちゃんとお父さんの悩みも聞いて、一緒に色々考えてあげるの、ってどう？」と、ミナが言った。

「そうだそうだ、俺なんてすっかりと親父の趣味に一日中つきあわされるんだぞ……」と、ムックは暗い顔をして言った。「この暑いによ」

ミナのおせっかいにしちゃ珍しく面倒だと思わなかった。そうだ。明日は日曜日、父の日だ。父さんが何で悩んでいるのか知らないけど、悩みを聞いてあげることぐらい出来るんじゃないか、とカイは思った。

「それより、カイ、ミナに話があったんじゃないか？」と、ムックがカイの肩を叩いた。

そうだ。この一週間、ムックに手伝ってもらっていたのだ。ミナと、どうしたらもっと仲良くなれるか。まず第一歩として、デートに誘うのであった。

「そうだ、ミナ……えっと、今度の……休み……」と、カイは思いついたように切り出した。

「なあに？」ミナが聞き返す。

「うん、いや、何でもない……」

「変なの」ミナは不思議そうな目でカイを見た。

やっぱり誘えなかった。外で早とちりに鳴き始めたセミの声が聞こえる。

勢いよく、坂を下る。自転車を持ってくればよかったと思ったが、もう遅い。思うよりも先に体が走り出してしまっていたのだから。

日差しが強い。照りつくような暑さが肌に当たってくる。汗が噴き出て、喉が渴いてくる。

家のある坂の上から、学校がある辺りの坂の下に着くまで十分ぐらいかった。商店街に入る前に踏切があり、それがちょうど閉じていたのでカイは足を少し休めた。既に潮の匂いがする。

すると、柔らかい手がカイの肩を叩いた。カイは振り向いた。

「カイじゃない！ どうしたの？」と、そこにはミナが立っていた。

私服でかわいい。手にはお弁当みたいなを持っている。

ミナは……？ と返すのがとりあえず精一杯だった。

「あたしはね、ママの弁当を小学校に届けにいくところ」と、ミナは手の弁当をつきだした。「カイは？」

切れ切れの息で、ミナに置手紙のことを話した。ミナの顔から血の気が失せた。

「それ、もしかしたらリアルにやばいじゃん！」

カイは黙っていた。

電車が通り過ぎ、踏切が開いた。カイは先に行こうとすると、ミナに止められた。

「待つて」ミナは言った。「あたしも行く」

二人で船着場へと急いだ。

商店街を駆け抜け、船着場に着いてみると、フェリーは既に出た後で次の便は一時間ほど来ないということになっていた。踏み切りで待つているうちに、出てしまったのだろうか。いくつかの場所を巡回するフェリーだから、もうしばらくは来ない。

「そんなに待てないよね……どうする？」と、ミナが訊いた。

走っている間は止まっていた心が、足が止まったことで走り始めた。父さん、そんなに悩みがあったようには見えなかったのに……しかし、そういう自分はよく父さんを見ていたわけではない。子供のころからあまり話す機会はなく、小さいころはよく遊んでくれたがそのうち帰ってきてても仕事をするだけで晩飯のときにだけ顔を合わせて話をするぐらいになっていた。

爽やかな風が吹く、波が勢いよくぶつかる切り立った岸壁の下、岩場に父さんの死体がある姿が頭に飛び込んできた。心臓がとたんに小さくなり、苦しくなった。寒気がした。頭からイメージを拭おうとしてもできなかった。

そのとき、後ろから声がした。

「おい！ お前ら何してんだよー！ デートか！？ 俺がさびしいじゃねえか！」

聞き慣れた声に振り向いてみると、そこにはムックがいた。漁船に乗っている。

「ムック！ その船は！？」と、カイがいえる前にミナが訊いた。

「おいおい、なんでそんな真剣になってんだよ……からかつちや悪かったか？ これは親父の漁船だよ。今、釣りに付き合わされてきたところだ。幸い、今回は一日中はかからなかったがな」と、ムックは言った。

「お願い！ その船で『若日島』まで連れて行って！ カイのお父さんが大変なの！」

「え？」

カイとミナはムックに事情を説明した。

ムックは自分の親父呼びに跳んでいって、店の裏で楽しそうに魚を捌いていた親父さんを引っ張ってきた。ムックの親父さんは事情を聞くとすぐに船を出してくれた。小さな漁船が勢いよく港を飛び出した。

潮の風が目痛い。カイは自分の力ではどうにもならないと思いながら、ただただ自分の予想が外れているのだということを切に願った。

若日島に着いたのは午後一時過ぎだった。ムックの親父さんが船を留めないうちに、カイとミナとムックは船を飛び降りた。

この炎天下、島の観光客は皆無であり、森の中の道はとても空いていた。

崖に着いた。

崖のそばに、父さんの靴が丁寧にそろえてあった。

全身の血が凍りついた。

自分を支える力が抜け、倒れそうになったのをムックがあわてて助けた。ムックは黙っている。ミナの目が涙ぐむ。ミナはカイを抱きしめる。

カイは、何も感じられなかった。目の前の光景が、いやに冷めて見えた。自分のことも、周りのことも、まるで小説を楽しむかのような、冷めた目で見えた。自分の中から何かがスウーッと消えていく。何も動かなくなつた。

そのとき。

「おお！ カイじゃないか！」と、後ろから声がした。

カイは勢いよく振り向いた。

崖からもつと離れた木陰に、父さんが寝そべっている。傍らには見慣れない、しかしどこか見たことあるような、普段から知っているような女性がいる。

「え……？」と、ミナとムックは思わず言った。

カイは無言で、ただ木陰の父さんを見据えた。驚きで開いた口は閉まらない。

すると、ミナが言った。

「ママ、なんでここに……！？」

父さんは、少し起き上がった。

「いやいや、すまん、もつと早く帰るつもりが軽いぎっくり腰になつてしまつて。そうしたらフェリーの時間を逃してしまったので、ちよつと休んでいたわけだ」

カイは深いため息をついた。全身の力が、さつきとは違う風に抜けていく。安堵で抜けていくのだ。あんな置手紙を残すから、自殺するのかと思つたよ……と、カイは言った。

「なるほど、それでそんなに急いでいたのか。その心配はないぞ、このとおりピンピンとはいかないが元気にしてる」と、父さんは笑つて言った。

ひとの気も知らないで……。

「でも、なんでミナのおふくろさんとカイの親父さんが一緒に？」と、ムックは訊いた。

ミナはムツクのわき腹にひじをいれた。そして、「やつぱり、最近ママ少し様子が変わったのよね……まさか交際相手が力イのお父さんだとは思わなかったけど」と言った。

ミナのお母さんにはっこり笑った。笑顔が、ミナに大変似ているほど、自分の父さんなら惚れるのも仕方ないや、とカイは思った。

お父さんは言った。「もと、交際相手、だな、ミナちゃん」

「え？」 ミナとカイとムツクの三人は言った。

お父さんは、ミナのお母さんの右手を持ち上げた。その手は、木漏れ日の中でもまぶしく輝いた。薬指に、新品の金色の指輪がはめてあったのだ。

「今日から、家族だ」

沈黙があつた。

そして、カイとミナとムツクは心の底から叫んだ。

「ええええええええええええ！？」

歸りの船で聞いた話だと、カイの父さんとミナのママは、カイの父さんの寄付活動を通して知り合つたのだそうだ。カイの父さんがミナのママが勤務する小学校へ寄付を持つてくると、いつも受け付けるのはいろんな役を買つて出るミナのママだった。それ以前にミナのママにしばらくカイら三人は小学校時代教わつていたのだし。知り合つた二人は、それぞれの子供に内緒で交際を始め、そして、今日ついに、カイの父さんがミナのママにプロポーズしたのであった。デートを暇さえあれば毎日のように重ねたのもあるが、相性的にも、惹かれあうものがあつたのだという。

では、あの夜の預金通帳を広げての落ち込みようはなんだったのか、と尋ねてみると、ああ、あれは預金通帳は結納やいろいろやる資金があるかどうか確認していたので、暗くなっていたのは告白を

前にしてものすごくネガティブになっていたのだけだという。

置手紙は、待ち合わせに遅れそうだったので急いでそこらへんにあるもので書いたのがたまたま細い筆ペンであったというわけで、特にシリアスな感じを意識したわけではないという。それにしては出来すぎだと思った。文字が綺麗だったのは、まあ、普通に文字が綺麗だったからだ。

と、いうわけで、カイは夏の季節を思わぬ形で迎えることになった。

「まあ、考えてみれば、好きな子が家の中に住むってことじゃない？ それってかなりチャンスじゃね？」と、ムックはひとごとだと思ひニヤニヤ言っていた。ミナに聞こえないように。「今日、あんなの中だったけど、抱きつかれたりしていい感じになってたじゃないかー」

本当に、ひとごとだと思ひやがって……。

カイは喜んでいいのかどうなのか、いまいちわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349q/>

若日島

2011年1月17日23時40分発行